
悪夢には誓いを[東京魔人学園剣風帖]

須田 継

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悪夢には誓いを「東京魔人学園剣風帖」

【Nコード】

N3445M

【作者名】

須田 継

【あらすじ】

悪夢にさいなまれる緋勇龍麻^{ひゆうりゅうま}は、ある日犬神に呼び出される。東京魔人学園剣風帖の十六話終了直後と外伝2が絡むお話。第零話での盛大なネタばれの為、この緋勇龍麻は既に色々知っています。

（前書き）

とつきまじんがくえんけんぶうちょう
東京魔人学園剣風帖のファンフィクションです。

十六話と外伝2が絡むお話。時系列は十七話前になります。

第零話でのネタばれのため、この緋勇龍麻ひゆうたつまは既に自分の出生を知っています。

『もう一つの選択「東京鬼祓師」』では人外と化していた黄色い人が、まだ人間だった頃のお話。

東京魔人学園剣風帖とは……

一九九九年——東京の《龍脈》は活性化していた。それによりもたらされる数々の不思議な事件。

真神学園に転校してきた緋勇龍麻は、それらの事件に巻き込まれていく。

学園伝奇シリーズの第一弾。東京に角刈りの番長とかいねえよ、ってツツコミは入れてはいけない。ファンタジー世界を描かせるベキ小林智美に学園モノとかが無理だったんじゃないか、とか言ってはいけない。

よく夢を見る。

——お？ またか。

真っ暗な、天地も左右も分からない場所に立たされている俺が見えた。正面には、随分と上背のある男がいて、そいつが何事が言っているらしい。しかし、その声は全く俺の耳には入ってこない。

夢の中の俺は男の方を見て首を振る。そして、男の手にあつた凶刃が振るわれた。左肩から右腰へ、袈裟斬りにされて俺はその場に膝をつく。

盛大に血をふきながら倒れる様を脳裏に焼きつける。どう考えても心臓に達しているように見えた。

夢はそれでお終い。あからさまな悪夢なのに、幾度となく見せられて最近では冷汗も出ない。

——予知夢、なんだろうな。

頬杖をついた状態のまま眼を開く。生物の授業が終ったようだ。

「緋勇^{ひゆう}。ちよつと職員室^{くわんしつ}に來い」

低い声に顔を上げる。声はよれた白衣の教諭の物だった。

「はい」

とりあえず無難な返事をして席を立つ。すると、後ろの席から伸びてきた腕に引き留められる。

「おい、ひーちゃん。何やったんだよ」

赤毛の親友が耳打ちしてくる。

「さあ?」

心当たりがないため首を傾げておく。心当たりがない、は正確じゃないな。心当たりがありすぎるからわからない。

「ったく。今日ももぐるんだろ? 待ってるぜ?」

傍から聞いたら意味不明だろう言葉に、思わず笑ってしまう。

「いや、今日はやめておく。たまには顔出せよ、剣道部主将」

「ちつ。剣道なんて本当は苦手なんだよ、わかってんだろ?」

「京一の剣はわかりやすく《剣術》だからな」

「ま、もぐらねえなら良いや。ラーメン屋で待ってるぜ」

「あいよ」

手をひらひらさせながら歩き出す。

初めて会った時から変わらない、屈託のない笑顔が俺に向けられ

る。

この親友の剣の腕はすごい。学問が弱くとも、この男は本質的な部分で賢い。だからこそ、たまに思ってしまう。

——俺の心配事が、京一にも筒抜けなのではないか。

それでも、そんな事無いと思いこみながら職員室に向かう。

職員室の扉を開けると、生物教諭——いぬがみ犬神が待っていた。

「遅い」

「すいません。少し別の用を済ませていました」

軽く頭を下げて謝意を示す。もちろん、上辺だけなのだが。それを解っているのだろう、犬神はあからさまにため息をつく。

「まあいい。ここでも話しづらくなってきた。移動するぞ」

——おいおい、また移動させる気か。

「結界張れば良いじゃないですか」

仮面が取れて、思わず不満たらたらに渋面になる。それに、向こうも眉間にしわを寄せた。

「俺が彼女の結界を破れるという事は、彼女も同じ事が出来るという事だ」

「面倒な話ですね」

俺は肩を軽く落とす。

彼女と言うのは俺のクラスの担任の事だろう。マリア・アルカードなどと解りやすい名前のおかげで正体がバレバレなのは言わないお約束だ。

ちなみに、犬神の方は犬から点を抜いた物が正体になっていたりする。二人とも、どうしようもない。

「で、どこにするんです？」

「旧校舎だ。五階で待っている」

さきほど京一には「もぐらない」と言った矢先なのに、もぐるはめになってしまった。まあ、でもコレは不可抗力だ。仕方ない。

「はい。じゃ、後ほど」

「ああ」

言いながら、犬神は職員用玄関へ歩いていく。

俺は俺で生徒用の玄関へ。部活動に勤しむ人間の方が多いため、放課後と言えど玄関にいる人数は少ない。

靴を履き換え、校舎裏へと回る。人の気配を避けて訪れたのは、堂々と『立ち入り禁止』の文字の踊る学園の旧校舎。

壊れた窓から中に入る。そして、奥の教室へと向かう。

進めば進むほど瘴気が溢れる場所に向かい、俺は教室の扉を開けた。

「はい」

軽く中にいるソレに手を振る。中には数匹の蝙蝠^{こつもり}。ただし、大きさは三十センチはあるかという巨大なもの。

この場所は、おかしな化け物があふれかえる封じられし場所。俺や仲間の《力》を強化するために勝手に使わせてもらっている場所だ。

最初は確信が持てなかった事なのだが、犬神はこの旧校舎と言う場所の管理者だ。だからこそ、人からすればどうしようもない寿命を持つあの男が、学校と言う社会に溶け込んでいられる。

そんな物思いにふけりながら、俺は拳を振るう。

久々に、周りの状況を考えながら指示を飛ばす戦い方じゃない為、楽だった。

状況・戦力を考えての作戦指示——いつの間にやらリーダーにされていた自分。しかし、本来の戦闘スタイルは、司令塔ではなく単なる殲滅屋なのだと思い知らされる。

今の状況はどう考えても虐殺中でしかないし。

——最初のうちは、怖くて仕方なかったんだけどなあ。

化け物とは言え、生き物とおぼしき存在の命を絶つ。

それが今では作業のようになってしまった。

だからこそたまに思う。

——人間として、これってどうなんだろう。

思いながら、地下への階段をおり続けていたら、いつの間にか
目的地に着いていた。

「遅い」

「アンタと一緒にしないでください。人間にはこれが限界ですって」

「人間？ お前を人間の数に入れるのか？」

心底面白い事を聞いた、と言わんばかりの犬神に、思わず顔をしかめる。

「そりゃそうです。こんな人間らしい人間、どこにいますか？」

「ほう？」

「自分の欲望に忠実で、その願いを叶える為なら自分の《力》を全力で使う。周りの事なんて考えちゃいない——ほら、人間でしょう？」

余裕たっぷりに笑ってやると、向こうはくつくつと肩を震わせていた。

「なるほど、本当に似てないな。お前ら親子は」

「見た事のない親に似ていないと言われてもね。育てられてないんだから似ないでしょう」

「そうだな」

言いながら、犬神は胸ポケットにしまっていたらしい『しんせい』を取り出して吸い始めた。タバコのおいがきつい。と言うか、そのタバコのセレクトは本当に昭和だと思う。犬神が昭和生まれとはとても思えないが。

「それで、ご用命は？」

首を傾げて犬神に問う。

実際、何の為にここまで呼ばれたのかについては聞いていない。

「確認だ。緋勇、お前も未来視^{みらいし}が出来るのか？」

『お前も』ですかい。ツツコミを入れたくなるのを何とか飲み込む。

直球の質問に、どうやら俺と同じ能力を持つ人間が先祖にいたらしい事が分かる。だからこそ、ここで嘘をつく意味がない。

「ええ。直近の出来事と自分の最期だけみたいですがね。後は過去^{かこ}視^し、遠見^{とおみ}、何でもござれです。夢で勝手に再生されるだけなので、制御できていないのが痛いですが」

「そうか。つまり——」

そう一呼吸置いて、犬神はしんせいの吸い殻を足元へ投げる。

「あの覗き見は不可抗力だったという言い訳だな？」

「は？」

「覚えてないともいう気か？ 残念ながらお前の《氣》ならきつちり感じてるんでね。犯人はお前以外にあり得ない」

非常にいやゝな殺気に包まれていく。

吸い殻が犬神先生のかかとによってすりつぶされていく様が、自分の未来を暗示しているようで嫌な感じゝって所だ。

「いや、身に覚えがないんですが……」

何の事を言っているのやらさっぱり、と続けながら、徐々に思い出していく。

「あ、もしかして天野さんをアパートに連れ込んだあた——」

最後まで言い終わる前に飛び退く。

俺の立っていた場所は犬神センセーのかかと落として陥没していました。直撃してたら死にますわい。

「ちょ、生徒に何と言う事を！」

「大丈夫だ、お前は俺の受け持つクラスの生徒じゃない」

「問題ありまくりでしょ、この送り狼！」

叫んだ瞬間に後悔した。

「ひーゆーっ」

おどろおどろしい声に背筋が寒くなる。

よくよく考えれば、眼の前の存在は人を装っているがかなり強い

妖。だから、当然こういう芸当も出来る。

「ちょ、タンマー!!」

眼にもとまらぬ速さで、俺の頬に三条の傷。右頬がマジで痛い。

「今更命乞いか？」

逃げるためにいくら後退しても、それと同等のスピードで追いつめられる。

よくよく見れば、普段は人を装うために目立たない犬歯と爪が、とっても鋭くなってる。心臓とか余裕で貫けるんじゃない？のん気に考えながらも、左に跳んでそのまま犬神の腹を蹴りに行く。

「マリア先生と違って、アンタは俺の血とか全力で要らねえだろうがあっ！」

蹴った勢いでそのまま飛び退く。《力》を込めての蹴りだったのに、犬神はそのままこっちに向かってくる。

マジでノーダメージですか？　ありえねえっ！

「要らないが、仕方ないだろう。死にたがるお前が悪い」

鋭い一閃が迫るのを、身を屈めてよける。

「死にたがってねえっ！」

そのまま京一の地摺りじず青眼せいがんの要領で顎を狙って拳を打つ――のに首をすくめて避けやがる。

そして、まずい事に気づく。

——振り抜き過ぎた！

《力》をこめ過ぎて、隙だらけだ。そして、そんな物を見逃してくれるほど甘い相手でもない。

「チェックメイト」

案の定、首を絞められて体を地面に叩きつけられる。土じゃなくて岩だからマジで痛いんですが、犬神センサー！。

即座に立ちあがろうとした所をおもいきり足で踏みぬかれ、変な声が漏れる。

「どうだ？ 久しぶりの負けの味は」

「マジで痛いです」

完全な手詰まりに陥ったため、神妙に答えておく。

「俺達からすればお前はまだ弱い。旧校舎（こくしや）を使うのは目を瞑（こ）ってやるから、生き残れるだけの強さを手に入れる」

「それはアレですか？ 親父みたいに死ぬなって事で？」

「そうだな」

素直に言われてしまうと、もう何も言えない。
そして犬神の足から解放される。

「お前は大きな《力》を持っている。ならばそれを使ってお前の思う通りの世界を描け」

——勝手な事を言う。

「それで俺が『世界征服した〜い』なんて思ってたらしたらどうする気ですか」

「その時は満月の夜にお前を止めてやるよ」

「期待してま〜す」

おどけた返事をしてはみたが、完全に黙殺された。犬神が階段を上がる音が響く。

そう言えば今日は三日月だったな。それで俺を圧倒するとか、本当に化け物め。

このまま横になっていると、下から這い上がってきた化け物たちに捕食されかねないので立ち上がる。

そして、俺はその場を後にした。

文字通りボロボロになりながら、暗くなってきた生徒会室の扉を開ける。

中にいるのは生徒会長を務める想い人一人。

美しい流れるような長い黒髪。白い肌を彩る長いまつ毛。白い学生服からもわかる豊満な胸の美女。

優しい性格ともあいまって、人気のある彼女を一人占めするには放課後のこの時間しかない。

「龍麻^{たつま}!？」

俺の格好に驚いて、彼女が駆け寄ってくる。

「悪い、葵^{あおい}。回復よろしく」

彼女に覆いかぶさるようにしながら頼む。戸惑った表情だった彼女は、それでも右手で俺の背中を包んだ。

柔らかい光が彼女を包む。癒しの光に包まれると、犬神に盛大に痛めつけられた傷が、少しずつふさがっていく。

「旧校舎に行ってたの？」

「うん。一人で」

「一人で!？」

「大丈夫。大怪我はしてないし、五階までしか行ってない」

腕の中の彼女の肩から力が抜けるのが伝わる。

「途中まで一人で行こうと思ったけど、葵とチューしたくなつて戻ってきた」

「えっ!？」

可愛らしく耳まで真っ赤にする彼女を見ると、嗜虐^{じやく}心がうずいてしょうがない。

「うつそ〜。最初から五階までしか降りないつもりだったよん。でも、キスしたくなつたのはホント」

彼女の顎を人差し指で上げさせて、そこにある唇に吸いつく。体を抱きしめ、彼女の口を舌でこじ開けながらの濃厚な口付け。それは彼女の回復の術よりも俺を癒していく。

大分長い時間そうして口づけてから、どちらともなく唇を離す。繋がった唾液をぺろりと舐めて、額にちゅっと音を立てて軽いキスをした。

「何かあつたの？ 龍麻」

自分でも『らしくない』と思っているのだから、聡い彼女にはバレレだった。

「最近夢見が悪くてね」

苦笑いをして誤魔化す。

「あ、いっけね。京一がラーメン屋で待ってるんだった。葵も一緒に行こうぜ」

「良いけど」

「それじゃ、行こうか」

葵の鞆を代わりに持って、彼女の手を引く。

やがて、俺は彼女を泣かせる。俺が袈裟斬りにされる未来は、どうあっても回避できないのだろう。

ならば、袈裟斬りにされても生き残るしかない。

「葵」

「何？」

唐突に呼びかけられて、彼女は小首をかしげる。

「大好き」

囁くと、彼女は頬を赤くさせてからコクリと頷いた。

——愛しているから、絶対に俺は死なないよ。

音にする事なく俺は唇で誓う。紫の空で光る明星に。

（後書き）

ここまでお読み頂き、ありがとうございます。

最初のうちは葵といちゃつくだけだったのですが、犬神先生をか
らませたら面白くなって長くなりました。

魔人学園の二次創作をしていると真神庵の事を思い出します。

真神庵と言うのは、魔人学園の公式HPだった所なのですが、今
井秋芳監督の個人サイトでもあったため……小説掲示板があったの
です。

今井監督、二次創作大好きな方なのでこんな事になっていたのだ
ですが、その小説掲示板には二種類ありました。陽は通常の二次創作
専門。陰は十八禁専門。

その結果、陰の方ばかり小説が投稿される事態に。挙句最終的
にはBLしかないという事態に……。ファンにとっては伝説です。

おかげで通常カップリングの作品を探す方が大変。なので、家の
緋勇龍麻が好きなのは普通に葵ちゃんにしています。ゲーム中、落
とすのが一番難しいメインヒロインですがね！（涙）

おっと、くだらない話が長くなってしまいました。楽しんで頂
ける事を祈っております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3445m/>

悪夢には誓いを[東京魔人学園剣風帖]

2010年10月9日05時46分発行